

## 東アジア自転車産業論

日中台における産業発展と分業の再編

■ 渡辺 幸男／周 立群／駒形 哲哉 編著

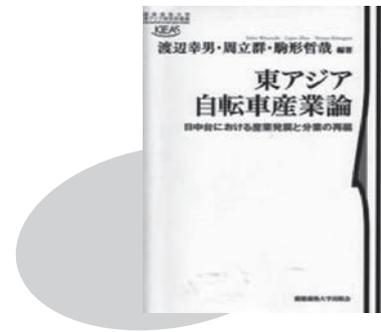
■ 慶應義塾大学出版会

.....

### 評 者

札幌国際大学学長

濱田 康行



本書は日本および中国の自転車産業について書かれた500頁に迫る大著である。著者は慶應義塾大学の渡辺・駒形両教授を中心とするグループと中国人研究者、まさに日中合作による作品である。

自転車といえば誰でも使っている身近な商品だが、それを作っている自転車産業というと、業界の様子から、産業界の発生と歴史、国際分業に至るまで、私達の知識は極めて限られている。それもそのはず、そもそもこの方面の研究者は少なく、従って研究論文も極めて少ない。自動車産業の研究は分量的には山ほどあるのに、これはどうしたことか。答えは簡単。私達が自転車産業にある先入観を持っているからである。それは、ローテクな地味な産業であり、一国のリーディング産業、少なくとも分析に値するような典型産業とは考えていなかったからである。

本書はこの誤った先入観をくつがえしてくれる。確かに、現在最大の生産地である中国でも、欧州製あるいは日本製の自転車を分解し部品をコピーすることから始まったのだが、完成した型での自転車産業は駒形教授によれば次のようになる。

「自動車と比べれば比較的低水準ながら、素材の生産とそれの部品への加工、そして完成車組立まで、近代工業の全要素が試されるものである」(p.461)

要するに典型的な機械製造業なのである。この典型産業が欧州から日本、そして台湾を経て中国に変遷するまでの半世紀（特に焦点は1990年代から現代）を日中両国を舞台にして描いたのが本書である。それは、今後この分野を研究しようとする人々にとって避けて通れない業績である。これが本書の第一の貢献であろう。

第二の貢献は理論的なものである。それは“東アジア化”というグローバル時代の国際分業を表現するキーワードを自転車産業を材料にして肉付けしてみせたことである。

“東アジア化”は研究リーダーである渡辺教授がかなり以前から主張していたものだ。評者も折に触れこれを耳にしたのである。しかし、なぜ世界化とかグローバル化とか言わずに東アジア化で止めるのか、その意味するものは何か、そもそもいかなる現象を示しているのか等々がやや不明であった。しかし、本書を読んですべては氷解した。

私達はD.リカードの遺した比較生産費説をあまりに単純に理解している。例えばこうだ。ある国のAという産業が比較劣位になって衰退する。A産業は他国に移り、ある国には比較優位のBという産業が発展する。しかし、この単純な図式はリカードの天才が示した結果の一枚なのである。現実には、この最後の一枚に至るまでに様々なプロ

セスを経る。

渡辺教授は次のように主張する。

「[日本]の自転車産業は東アジア化により消滅したわけではなく、東アジアで再構築されたのである」(p.433)

日本だけを見ていれば、完結型(部品から組立までの一貫生産)は確かになくなった。しかし、視野を中国を中心とした東アジアに広げてみれば自転車産業は成長・拡大して、そこに存在する。変化したのは日本の参加の仕方であるというのだ。私達は、モノづくりの現場だけに囚われがちだから、かつての一大産地であった堺が衰退して天津が盛えている、とだけみてしまう。

渡辺教授を中心とする研究グループは、東アジア化が他の日本の製造業、特に中小企業の多い分野で生じる、生じつつあることを示唆している。

本書の第三の貢献は、現代中国の製造業の発展経過を自転車産業を例として示したことだ。既にGDP世界第二位の地位についたこの大国は、これからも様々な製造業を発展させていくだろう。その発展過程は、大国的であり政治的には社会主義国という特徴を持っている。国有化企業から民営化企業。これを縦系とし、ある地域・都市から

他の地域・都市への移動を横系として中国製造業の発展図は織り上げられていく。その一例、典型例を本書は十分に示している。

“望蜀の感”を述べさせてもらえれば以下の点だろう。

中国の国有企業が衰退してしまった原因とプロセスをもう少し知りたい。役人に経営能力がないと言ってしまうばそれまでだろう。中国共産党がこの先どこまで経済をコントロールしていくのか。中国という資本主義国はどのような着地をするかを考える材料が欲しいのである。また、国有でも民営でも、そこでの労使関係はどうなっているのだろう。私達が数年前に見た限りでは、内陸部からの女性労働者の状況は労働者階級の国という看板とは一致していなかった。

本書は多くの文献、現場の資料のみならず、多くの時間を費やした聞き取り調査に基づいている。その際、渡辺教授達が懸命にノートを取っていたことを思い出す。本書の礎として一体、何冊のノートが書かれたことであろうか。著者達の“必ず現場をみる”という行動力と真実を求める姿勢に敬意を表したい。